本無形文化財の数値化と保護状況などに関して、文化財保護の専門家である菊池健策先生にご指導いただいた。菊池先生は私の質問に答えてくださり、文化庁の最新の研究出版物もくださった。

現在私は中国に戻り、資料の整理とともに研究を更に進めるための活動を開始している。

「城下町の近世武士住宅」

Delphine Vomscheid
（フランス国立高等研究院）

2013 年 10 月 28 日 から 2013 年 11 月 17 日まで、神奈川大学の非文字資料研究センターに訪問研究員として招聘された。今私は、パリのフランス国立高等研究院の博士課程の 2 年生であり、東アジア文明研究センターの研究員として、日本の近世武士住宅を専門に研究している。特に、この滞在の主たる目的は金沢・松江・萩城下町の古地図と武士建築が描かれた絵画のような非文字資料を集めることであった。

まず、神奈川大学の図書館と、非文字資料研究センターおよび内田研究室の蔵書で研究した。詳しい古地図（金沢・松江・萩城下町）と武士建築の絵画（大名屋敷・城・家臣団住宅）のようなさまざまな非文字資料を見つけた。この古地図では、武士地と町人地の区別がよくわかるので、とても面白いと思う。旧城下町の武士と町人の比率を知ることができるので、このような資料は大切だと思う。絵画では、建物の江戸時代の様相が見ることができるし、武士の生活がわかる。さらに、この城下町の武士住宅跡の現在写真が載っている本も見つけた。

また、11 月 3 日には、金沢旧城下町に武士住宅跡の見学に行った。現在の金沢市には江戸時代と幕末の武士住宅が残っている。幸運にも、解体する直前の下級武士住宅の泉家を視察できた。今までこの家には人々が住んでたが、今後は金沢湯涌江戸村に移築して博物館に実物展示されることになるという。旧中級武士の寺島家も視察した。この住宅は立派な家と庭であって、とても貴重な遺産で、中級武士の生活がよくわかる。茶室もあるし、座敷もあるし、倉もあるし、立派な庭もあるし、武士は高尚な人物であったことがうかがえる。長町の武家屋敷も見学した。下級武士の旧高田家長屋門（市指定保存建造物）がある。この建物は長屋門だけだが、入ることができるのでとても面白いと思う。実際に、中間部屋と馬屋に入ることができるので、長屋の規模がよくわかる。そのほかにも、上級武士邸宅の家来（中間）生活がわかる。足軽飛脚の旧清水家と旧高西家も視察した。下級武士なので、家も庭も小さいが、下級武士の生活がよくわかる。また、石川県金沢城調査研究所の研究者の方にお会いして、金沢城下町の歴史について話したり、研究の資料の利用についての助言をいただいた。とても面白い出会いだった。

その後、東京の博物館にも行った。東京国立博物館の「京都―洛中洛外図と障壁画の美」の特別展を見に行った。この展覧会の中に立派な芸術作品があった。特に、洛中洛外図屏風の作品は稀に見る美しさで、これを見ることができて、とても嬉しかった。京都は城下町ではなくても、京都に住んでいだ武士が大勢いたため、武士住宅が残されている（将軍邸）。また、武士の日々の生活も表現されている（犬追物の光景、儀式の光景）。そのほかにも、この展覧会の中にも京都の二条城の襖が展示されている。特に、二の丸御殿大広間四の間の「松鷹図」は立派な芸術作品であって、武士の洗練さを表現していると思う。このように、この美しい展覧会は屏風でも芸術作品でも京都の武士の文化がわかる機会であった。また、江戸東京博物館のコレクションを見に行った。特に、きれいな大名屋敷の模型があるので、建築の材料と建物の規模がよくわかり、とても面白いと思う。

写真 1　金沢市（大手町）の寺島家

このように、非文字資料研究センターの３週間の滞在は本当に素晴らしい経験になった。日本人の研究者と話す機会が持てたこと、日本の図書館を利用できたこと、もちろん実地調査できたことは豊かな研究経験になった。

本当に、非文字資料研究センターに感謝したいと思う。

近代日本キリスト教の伝道活動と民俗的な注目
――明治時代横浜市の考察を中心として

沈 梅 麗
（華東師範大学対外漢語学院）

近代日本のキリスト教布教活動は、布教にあたって日本民俗の現象を研究し利用することを重視しているが、これは、キリスト教が外国へ布教した伝統と大きな関係がある。キリスト教が外国へ布教した歴史からみると、宣教師は布教先に到着すると、できるだけ早くその土地の風土や人情を学んだ。その布教の戦略は、現地の文化への適応性という特徴を表している。つまり、このような文化適応性は、実はその国の伝統文化と儀礼風習に適度に従うということを表しているのである。

また、本文が述べる「近代」の概念は主に中国史学会が定義するもので、その期間は大体 1840 年から 1919 年であり、日本の明治時代（1868 － 1912）とほぼ重なっている。

明治時代横浜地域の宣教師団体の中で、アメリカ長老会の宣教師ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（左図）の影響は大きく、彼らは 1859 年神奈川に上陸してから明治開教（1873 年）前の十数年の間に、医者をしながら密かに伝道していた。当時、このように宣教師が西洋医学を日本に伝え広めた勢いは非常に大きく、日本皇漢方医道が徐々に衰退に至り、日本の伝統医療の習慣に大きな変化をもたらした。宣教師が医者の身分を通して伝道する形はザビエルの時代からすでに存在し、1563 年来日のポルトガル宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis）は、日本の宣教師はよくハンセン病など差別される病気を治癒し、彼らは時々日本の薬でも病を治したが、患者にそれを教えなかったと記載している。

図１　アメリカ改革長老派教会ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（横浜開港記念館）

明治８年開教以後、キリスト教は日本での布教活動が順調ではなかったが、宣教師たちは多くのやり方で布教をすすめた。例えば、日本最初の横浜神学校明治学院のような教会学校を創立したり、『常盤』、『女学雑誌』（横浜明治学院岩本善治などが創刊）などの教会雑誌を創刊し、更に慈善活動にも積極的に参加していた。これらの形式を通してキリスト教信者を拡大する努力をする一方、宣教師たちは神学校、教会女学校、教会新聞などのメディアを通して日本社会の民俗を批判した。例えば、日本の婚姻の形式、男性の小児性愛の悪しき習慣、女性の入浴習慣及び性概念などである。また、禁酒を提唱し、日本の服装が華美すぎること、日本の多神教崇拝なども批判した。宣教師たちは以上のようなやり方で、日本社会にキリスト教文明を輸入したのである。

明治時代の日本民俗全体を見れば、キリスト教の布教は一種の策略として展開されたが、ヘボンなどの欧米宣教師たちの努力のもと、日本伝統社会のあらゆる方面ですでに西洋のキリスト教文明は浸透していたのである。

図２　“酒不可飲”（女學雑誌 275 号 明治 24 年 7 月 25 日）